

転入者として先生方にあいさつをし、教頭先生の右側の自分の席に座った。担任でもないし、学年所属もないし、とりあえず何をしようかなと思案していたところ、電話が鳴った。生憎教頭先生は席を外していた。仕方なく前任の「□□中学校」と言わないように気を付けながら電話に出てみた。すると、いきなり苦情の電話であった。事情がわからない私は話を聞きながら、おおよその状況を把握していった。このような場合、絶対に言わないようにしていることがある。「すみません、転勤したばかりなのでわかりません」というセリフである。4月1日の朝8時半でも、相手からすれば私は△△中学校の教員なのである。

初仕事が苦情を聞くことであった。「すごい学校に来てしまった」と思ったが、私の顔はぶすくれた状態から眼光鋭く生徒指導モードに変わっていたはずである。その後、ファイルを見て自分の仕事内容を確認していたところ、また電話がきた。今度は、隣の中学校の生徒指導主事の先生からだった。「うちの生徒と△△中学校の生徒が一緒にたまっている」という内容だった。私はとりあえず出勤した。隣の学校の先生方と合流し、生徒がたまっている家に踏み込んだ。中にいた△△中学校の生徒には「今日から△△中に来たから、よろしく」などと言いながら。このときはまだ、この生徒たちと毎日接するようになることに思いを巡らす余裕はなかった。

エキサイティングな△△中学校での一日が終わり、私が思ったことは、「これからどうなるんだ。もたないかもしれない」ということだった。△△中学校では、生徒指導はもちろんのこと様々なことを学ぶことができた。メインの生徒指導では、私と一緒に赴任した校長先生に指導していただきながら仕事を進めていった。校長先生に教わったことは、今でも私の財産となっている。

毎日がドラマの連続だった△△中学校での2年間が終わり、イタリア、ローマ日本人学校に派遣されることとなったが、所属は△△中学校のままで、勤務態様は「長期にわたる出張研修」というものであった。したがって、ローマ日本人学校での3年間は、そもそも研修だったのである。異国の地での生活、日本の教育に加えてイタリアの素材を生かした学習、現地の学校との交流、全国から集まる先生方、高学歴かつ高収入の保護者、現地法人の方々、そしてイタリアの人たちなど、何から何までが教員として、かつ一人の人間としての研修であった。

4校目の勤務が終了してもへき地を経験できないでいる私であった。イタリアに行く前にいろいろな方の話を聞くと、日本人学校勤務がへき地経験になるという方とならないという方に分かれていた。日本に帰国し勤めた〇〇中学校の校長先生に聞いてみた。「校長先生、私のローマ日本人学校勤務はへき地経験になるのでしょうか」とすると、校長先生は「ああ、そういうことは県教委に聞いてみないとわからないんだ」とのことだった。

翌日、校長先生に呼ばれて校長室に行ってみると、「高澤先生の場合は、へき地経験とみなす」という答えだったそうである。「そうなんだ。まあ考えてみれば、ローマはへき地よりも遥かに遠いからいいか」と考え一応納得した。ということで、私の場合は、実際にはへき地の学校に勤務していないのだが、へき地経験となった。

転勤するたびに自分としては激動の教員人生を送ってきた私ではあるが、5校目の〇〇中学校での1年目が、教員としてのターニングポイントになったことは否定できない。私にとって平成14年度は、その後の教員生活の礎となった気がする。皆さんにも人生のターニングポイントがあったのではないだろうか。あるいは、今がターニングポイントになっているのかもしれない。そのことは後になってからわかることではあるのだが。

「転勤は最大の研修」今までの教員人生を振り返ると、やはりその通りだと思う。